

「あぢきなし」の基本的語義

宮 武 利 江

本稿は、主として源氏物語の用例により、中古の「あぢきなし」という語の「核」となる語義を明らかにしようとしたものである。「あぢきなし」は「事が(自分の)思うようでない(そしてそれをどうすることもできない)」という認識を基本的な語義とする。そこには、「ままならぬものだ」と悟るニュアンス(諦観)や、「どうしようもない」と嘆くニュアンス(慨嘆)、時に後悔の気持ちを読みとれることがあり、他者が原因であるときは不満・不快、自分が意図していない・期待外れだ、という不本意な気持ちをあらわすこともある。また、「相手が思っていることが事実・現実と違っている」として、他者の行為を「見当違い・心得違いである」と評する(批判・非難)、あるいは他者の行為を妥当でないものとしてたしなめる(指導・諫言)場合がある。さらに、副詞的に下接する用言にかかり、「どうしようもなく」という意味をあらわすこともある。以上の点で、同じく「つまらない」と訳されることのある「あいなし」(正当な理由がない)、「すさまじ」(客観的な基準・前提に照らして合致しない)とは「不快」の根拠が異なっている。

キーワード：あぢきなし 源氏物語 枕草子 マイナス評価 あいなし すさまじ 語義の「核」派生

はじめに

ひらがなを用いて書かれた中古の物語や随筆・日記文学、いわゆる平安仮名文学作品に使用されている形容語類の意味に関しては、従来多くの研究がなされてきたと思う。しかし、それらは主として「あはれ」を

「かし」に代表されるようなプラス評価をあらわす語を取り上げており、特に「きよし」「きよら」「うるはし」などといった美に関する形容語(美的語詞)などと称されることもある)の、細かな使い分けの比較等が中心となっている。筆者は中古の形容語の中で、「評価

に関わるような語のグループを取り出し、平安貴族社会の価値観とも照らし合わせながら、それらの語義や使い分けの基準を明らかにしようと考えているが、そのためにはプラス評価の語彙だけでなく、マイナス評価をあらわす語群にも目を向けなければならぬ。

マイナス評価をあらわすと考えられる形容語としては、現代語に置き換えると「悪い・良くない」といった一般的な否定となるものから、「醜い・汚い」などの外面的（あるいは内面的）な評価、そして「卑しい・はしたない」などの内面的評価、さらに「嫌だ・気に入らない」というような主観的な否定語まで、その範囲はかなり幅広くなるであろう。また、先に述べたように、管見ではこのようなマイナス評価の語彙を取り上げた先行研究は数えるほどしかない。中で、筆者と問題の設定は異なるものの、既に「美的理念語を追求し、検討しようとするならば、醜を表現する言葉、嫌悪表現語についても同様の過程を経なければならぬ」として、土屋博映氏が「にくし」「すさまじ」の二語について、（特に枕草子の用例をもとに）論じた研究がある。³氏によると、「すさまじ」は「当然そ

うなるはずという前提・基準がある」のに、「対象が基準となるものに調和せず」よくない、という客観的否定および不快感をあらわす、という。そこで今回は、現代語訳では「すさまじ」と同じ「つまらない・面白くない」の語があてられることの多い「あぢきなし」について、別の類義語と思われる「あいなし」との比較も交えながら、特に源氏物語での用例を手がかりとして考えてみることにした。

一、枕草子の「あぢきなし」

枕草子のいわゆる「ものづくし」章段には、形容語を冠した「〜もの」の例が列挙されているため、形容語の語義を考察するときにはよく援用される。しかし、清少納言の言う「〜もの」は、世間一般の人が当然の如くその形容語でイメージするのであるものを挙げているとは考えられないので、注意が必要である。たとえば、「むつかしげなるもの」の章段で挙げられている「猫の耳の中」や「縫物（刺繍）の裏」などは、ふだん意識して見ることは少なく、誰もが「むつかしげ」なものの代表とするような類ではないだろう。しかし、

言われてみればなるほど「むつかしげ」だ、と思えるのではないか。清少納言は、それぞれの形容語の常識的な使い方、ストレートな表現ではなく、彼女の感性を読者に誇示して楽しむかのように、普通では考えつかないようなものを「くもの」と表現して、その意外性からくる驚き、けれども確かにそう言えばそうだ：という納得・共感を引き出して、感心させ、賞賛を得ることを狙っていたのではないかと思えるふしがある。ただし、根底にはそれらの形容語の中心的語義が共通して存在しているはずなので、典型例というよりはむしろ「こんなものもそう形容される」という例として捉えれば、より根本的な語義理解のために役立つことは確かだろう。

「あぢきなきもの」には次のようにある。⁴⁾

わざと思ひ立ちて、宮仕へに出で立ちたる人の、
もの憂がり、うるさげに思ひたる。

養女（とりこ）の、顔憎げなる。

しぶしぶに思ひたる人を、強ひて婿どりて、「思
ふさまならず」と、嘆く。

ここに挙げられているのは、①自分から進んで宮仕え

に出てきたくせに、なんとなく憂鬱そうにして、あれこれ面倒に思っている。（不満げな態度を見せる。）②わざわぎ養女にしたのに顔つきが憎らしげである。（養女なら選べるはずなのに）③しぶぶっていた相手を無理やり婿にしておいて、「思うようでない（期待はずれだ）」と嘆く。という三例である。この「あぢきなし」を、一般注釈書の類では「つまらぬもの。面白みのないもの（岩波書店・日本古典文学大系）」「無意味でどうしようもないもの（小学館・日本古典文学全集）」「困ったもの（新潮社・日本古典文学成）」のように訳しており、全集の頭注には、「筋道に沿っていなくて無益だ・無意味でつまらない・どうしようもない、などの意という」とある。注釈書によってバラバラで、どれも「口語訳」という制約もあり、場当たり的解釈であるのは否めない。しかし、辞書類でもこれらのような意味がそれぞれブランチとして立てられていることが多い。どうも「あぢきなし」の語義の「核」のようなものがはつきりせず、それが口語訳の場合にも災いして、文脈頼り、その場限りのものになっているようなのである。

中古の「あぢきなし」、特に枕草子のそれについてのまとまった論考として竹内美智子氏の著作中の言及があるが、氏は「あぢきなきもの」章段の三つの行為に共通する点として「確かな見通しを持たないで」「大事な行為をしたために、思うような結果が得られなかったところにある」とする。氏は「あぢきなし」の意味には「状態を表わす意味（客観的意味）」と「情意を表わす意味（主情的意味）」の二つがあるとし、枕草子の他の「あぢきなし」の用例全体を検討した結果、枕草子の「あぢきなし」はほぼすべて客観的意味であり、「他人の行為を妥当性を欠くものとして批判する」例だと言う。その批判の規準としては「物事が、作者にとって納得のいく、筋の通ったものであるかどうか」が重要だと述べている。同著では、その「客観的意味」を、

(イ) 他人の行為を客観的に見て、それが、かくあるべしという規範・規準から外れたものであると批判する際に使う。

(ロ) (イ) の意味と基本的には同じであるが、話し相手の行為に対して使われるもので、第三者的

な批判ではなく、相手の行為が当を得ていないことをいましめたり、論じたりする際に使う。

(ハ) 会話の受け答えの際に、話し相手の言葉をとしなめたりするもので、一種の間投詞のような役割を果たす。：「何をおっしゃるのです」程度の軽い意味で使われる。

(ニ) 「あぢきなく(う)」の形で副詞的に使われ、「思いがけず・わけもなく・むやみと」などの意を表わす。

以上の四種に分類しており、枕草子ではそのうちの(イ)がほとんどだという結論に達している。例えば、「汗衫・唐衣・袴」などといった衣服の名への批判を述べている「などで官得はじめたる六位の笏に：」章段中の、「袴、いとあぢきなし」のような用例がその典型であり、「(命名の)理由が納得できない」ことを表しているという。ただし、もともと「あぢきなし」の語義としては、このような「自分の納得のいく理由がない」という場合に使われるよりも、「道徳・礼儀・仏道・世間の道理」などに照らし合わせて「他人の行為を批判する」のが基本であり、そのような何らかの

「規範・規準」に合わない、というのが「あぢきなし」の客観的意味である、としている。

これに対し、枕草子以外の中古女流文学作品の「あぢきなし」は、「主情的意味」の方で用いられることがほとんどである、というのが竹内氏の見解である。源氏物語の「あぢきなし」も、その四分の三は「主情的意味」として解せるといふ。「男性の抑えきれない恋心」や恋愛に関わることさらに用いて、「自分で自分の心がどうにもならない嘆き」を表したり、より複雑な「自分自身の人生が思うままにならない」「ぬきさしならない、逃れようのない」痛切な「深い嘆き」を表し、また、源氏物語の登場人物にとつての世の中、すなわち宮廷社会を対象とする場合のように、「この世がままならぬことを嘆くのではなくて、所詮この世がままならぬものであることを悟る意味」で使われる場合もあると述べる。ただし、その場合「情意の客観化」が起こったことになり、源氏物語の「あぢきなし」の用法にはこのような「個々の現実を臨んでそれに嘆きをぶつけるのではなくて、嘆くことをも含めて、事態全般に通じる「ことわり」として距離を置いて眺め

る傾向」が強い、とまとめるが、こうなると「客観的」「主情的」という線引きが不鮮明である。

しかし、このように「あぢきなし」の用法に客観的・主観的の二種類があり、主観的な意味としては「嘆き」を表すとする考えは、他に山崎良幸氏も提示している。^⑥氏は枕草子の「あぢきなきもの」と、先ほどの「袴、いとあぢきなし」というような用例を分析し、

一、「あぢきなし」は、本来筋の通らない、条理を越えた性質またはさまを表わす。

二、転じて、そういうことわりの存在を認め難い対象に対して、「何とわけのわからぬことよ」と思い、または、「こんな筋の通らないことがあり得るのか」と嘆く心の表現に用いられる。しかししてしばしば批判または評価の意がこめられる。

三、更にそこから、そういう対象に対して、せんすべなしと観ずる、いわば諦観の表現ともなる。

とまとめる。竹内氏の結論と基本的には一致しており、「筋が通らない」事実の表現から、それを「嘆く」表現となることも認める点でも、さらに「諦観」までを表すとする点でも共通している。

しかし、筆者には「筋が通らない・妥当でない」という客観的な批判の語から、それを「嘆く」という用法が生まれるということが、どうも今ひとつ理解できない。条理に合っていない、おかしい、という非難の気持ち、たとえば自分自身に向けられたとき、「全く我ながらおかしいことだ」という反省になることはあるだろうし、筋の通らないことも事実として存在するのだ、と認めざるを得ないとき、そこには諦めの気持ちも含まれよう。しかし、「あぢきなし」の語義の「核」を、「道理などの規範に合わない」というところに置こうとすると、この語の多様な用法、バラバラに見える辞書類の語義ブランチのつながりが、説明しにくいように思えるのである。

また、注釈書類では「あぢきなし」を「つまらない・面白くない」と口語記することが非常に多いが、「あぢきなし」の、心情表現に関わる用法が、両氏の述べるような「嘆き」「諦観」であるとしたら、「つまらない」という訳語は的外れか、少なくとも浅薄なものということになる。一方で、客観的な評語としての「あぢきなし」が、直接相手に向けて発せられるとき（竹

内氏の（口）の場合のように）、「そんな筋の通らないことをするなんて（↓つまらないからやめなさい）」という経緯で「つまらない」と口語記してもよい場合があるかもしれないが、そう多くはないだろう。それではなぜ「あぢきなし」の語義に「つまらない」意があると解釈されてきたのか。単に文脈に当てはめるとスムーズな現代文にできる、という理由だけによるのだろうか。これらの口語訳が頻繁に用いられる理由を、もう少し考えてみる必要があるだろう。

実は、注釈書類で「あぢきなし」と同じく「つまらない・面白くない」という現代語訳があてられている語に「あいなし」がある。両語は連続する文脈に現れたり、類似した場面で用いられたりすることもあるので、その語義が錯綜しているように見える。この問題を重く見た山崎良幸氏は、主として源氏物語の用例をもとに、両語の相違点を明らかにしようとした⁷⁾。氏は、「源氏物語並には同時代の文献に見られる「あいなし」は、何とかしなければならぬと思う心がまずあって、しかもそれにもかかわらずどうしようにもすべがなくて混迷し、当惑する心情の表現である。…これに

精確に対応する現代語は見出し難いが、多少の注釈を補うならば、「どうしようもない」などがやや真意に近いかと思う。」と述べ、結論として「あいなし」は「諦観と歎きの心の表現で、本来評価の意識はない」、「どうしようもないと嘆く、困惑と諦観の心の表現」であり、「あぢきなし」は、「本来筋の通らぬ、条理を越えた性質またはさまを表わす。転じて、ことわりの存在を認め難いこと、または容認できないことに対して、嘆く心の表現に用いられ、そこに主体の批判ないしは評価が表現される。」と述べている。

たしかに「あいなし」も語義の規定が難しい形容語であるが、山崎氏の結論だと「嘆き・困惑・諦観」が根幹ということになる。しかし、竹内氏の指摘通り、源氏物語などの「あぢきなし」の用例の半数以上が「主情的意味」で用いられているとしたら、そこに表現される「嘆き」や「諦観」は「あぢきなし」の語義において大きなウェイトを占めているはずであるが、両語の違いをどう考えたらよいのだろうか。

また、主に源氏物語の「あいなし」の全用例を検討することで、その「根本的な語義」を抽出しようとし

た辻本裕成氏の論考⁽⁸⁾によると、「あいなし」は「行動や存在に、客観的、理性的に見て、適正な根拠、理由が見出せないことをいう」語であるという。こちらの解釈だと、先の「あぢきなし」の語義として示されていた、「妥当でない・わけがわからない」と重なってくる。枕草子の「あぢきなし」は「自分から見ても不当でない、という点で、「客観的・理性的」な根拠がない、というのは少しずれるかもしれないが、基本的には「何らかの規範・規準に合わない」のが「あぢきなし」だとすれば、やはり両語の相異は不明瞭である。

本稿では、「あいなし」の詳細な用例検討の余裕がないが、二語の口語訳が（結果的に）類似してしまうとしても、根本的な語義の「核」には違いがあるはずであるという確信のもとに、「あぢきなし」の源氏物語の用例を再検討してみたい。先に述べたように、枕草子の用語選択には他の中古仮名文学とはやや異なる意志が働いた可能性があるとしたら、やはりフィクションとしてかなり一貫性を持った表現手法が感じられる（また、紫式部という表現者の言語に対するセンスに信頼を置くとして）源氏物語における用例から、

もう一度「あぢきなし」の語義を考え直してみる必要があると思われる。

二、源氏物語の「あぢきなし」

源氏物語には全部で六五例の「あぢきなし」が用いられている。どのような場面・文脈で、どのような対象に対してこの語による表現がなされているかを整理してみたい。(以下、用例本文は岩波書店『日本古典文学大系』による。() は原典補入、〈 〉内は原典を参考にした筆者の注記である。)

二―一、あぢきなき「世」

まず、「あぢきなき」と、連体形で直接修飾する語句としては、「こと」が八例、「もの」が四例、「世」が二例、それ以外が五例あるが、じつは「もの」の四例もすべて「世(の中)」を指している。ほかに、文脈上「世」を「あぢきなし」としていると考えられる例を合わせると、一一例にのぼる。山崎氏も指摘しているが、「あぢきなし」と形容される対象として最も多いのが「世・世の中」であり、対して「あいなし」

にはその用例が一つもない。つまり、「あぢきなし」の語義を検討する上で、大きな手がかりとなるはずの用例なのである。

例えば、京を去る決意をした源氏のもとを(我が身を捨ててまでは)訪ねる人もない状況に、源氏が慨嘆する次のような場面がある。

① …さしあたりて、いちはやき世を、思ひはぐかりて、(源邸に)まゐり寄り寄る人もなし。…かゝる折は、人わろく、うらめしき人おほく、世の中は、あぢきなきものかな、とのみ、よろづにつけておぼす。

【須磨】

この場合、自分の身の回りの人々が、世間が、(状況の変化によって)手のひらを返したようによそよしくなったことが、世の中とは「あぢきないものだ」と評させる根拠となっている。類例は、連体形以外でも、源氏が明石入道に語る中で「世の常なき」を「あぢきなく」思う、というように現れる。

② 「…みやこ離れし時より、世の常なきもあぢきなう、行ひよりほかの事なくて、月日を経るに、心も、皆くづほれにけり。…」

【明石】

これらの例を、注釈書では「面白くなく」などと訳すが、仏道に向かうという心の動きにつながる契機としては、やや軽い印象を与える。先行研究の言うように、ここには「どうしようもない」といった「嘆き」の響きを読みとるべきであろう。ただし、それが「条理に合わない」故の嘆きかどうかには疑問がある。このような例だけを見ると、変わりやすい人の心は筋が通らない、と解してもいいようだが、次のような例はどうだろうか。

③ 去年今年、うちつゞき、かゝる事を見給ふに、世も、いとあぢきなう、思さるれば、かゝるついでにも、まづ、おほし立たる、事はあれど、また、さまざまの御ほだし多かり。

【賢木】

④ みや（藤壺）も、春宮の御ためを思すには、（源氏が）御心おき給はん事、いとほしく、世を、あぢきなきものに思ひなり給はゞ、ひたみちにおほし立つ事もやと、さすがに、苦しう思さるべし。【賢木】

③は葵の上と桐壺院をたてつづけに亡くした源氏にとって、世の中が「あぢきなく」思える、ということ、④は、藤壺中宮が、あまり源氏を突き放しても春

宮の後見である源氏が世の中を「あぢきなく」思うようになってしまつて、出家を思い立つようなことでもなつては困る、と悩む場面である。これらの場合、「道理」とか「規範」に照らして「おかしい」「わけがわからない」と嘆く状況とはいえないだろう。むしろ「自分の思うようではない」といった意味に解した方がびつたりする。つまり、①・②も含めて、「自分の想定外・期待外れ」、「思い通りでない」あるいは「思うままにならない」状況を「あぢきなし」と表現しており、「嘆き」もそこに由来すると考えられるのである。さらに、次のような例（⑤結婚話にそれなりに対応している匂宮に対し、恋愛に興味を持たない薫の描写、⑥高僧の説教としての「この世はかりそめのあぢきないもの」）になれば、ますます「規範に合わない」という表現とは離れる。⑤に「思ひすました」とあるように、これらの「あぢきなし」は「所詮この世はままならぬもの」という悟りにつながるものとなっている。

⑤ 中将（薫）は、世（の）中を、深く、あぢきなき物に、思ひすましたる心なれば、「中く、（女に）

心とゞめて、〈俗界を〉行(き) 離れがたき思ひや、
残らむ」など思ふに、…思ひ捨て給ふ。 【匂宮】

⑥年ごろ、〈八宮の〉学び知り給へることゝもの、

深き心を、〈聖は〉説き聞かせたてまつり、いよ

いよ、この世の、かりそめに、あぢきなきことを、

〈八宮に〉申し知らすれば、… 【橋姫】

要するに、「あぢきなし」の「合わなさ・わからなさ」は世間一般の道理や規範に照らしてみても感ぜられるのではなく、もう少し単純に「自分の思うところ(想定・期待・意図)と合わない」ということに始まり、「思うようでない」事態に落胆したり、それを慨嘆する気持ちが生まれたりするが、その事態そのものをどうにもすることはできない、という状態で用いられるのではないだろうか。だからこそ、どうにもならないのだ、と事態を受け入れれば、諦観にもなると考えられるのである。

「世」以外に「あぢきなし」が修飾する体言に、「すき心」「身」があり、これはどちらも源氏が自分自身のことについて考えたり人に述べたりしたものである。

⑦「かうくのこと(齋宮入内)」をなん、思う給へ

わづらふに。母御息所、いとく、おもくしく、
心深きさまにもやし侍りしを、あぢきなきすき心
にまかせて、さるまじき名をもながし、憂きもの
に(私は)思ひおかれ侍りにしをなむ、世にいと
ほしく思ひ給ふる。… 【湊標】

注釈書では「面白くもない」などと訳されるこの例は、源氏が藤壺に六条御息所の娘である齋宮の処遇を相談する場面に現れる。御息所への自分の気持ち・態度を、今自分のもつとも思う人である藤壺に「あぢきなきすき心」と言う。このような場合、「(好きで好きで)どうしようもない」という意ではなく、むしろ客観的に、「自分としては思いもよらない、我ながらどうにもしようがないと思われるような好色心によつて…」と自省のポーズを前面に出していると解釈できるのでないだろうか。

⑧(雲林院は)所がらに、いとゞ、世の中の常な
さをおぼしあかしても、猶、憂き人しもぞと、思
し出でらるゝ。…この方の宮みは、この世も、つ
れくならず、後の世は、頼もしげなり。「さも、
あぢきなき身を、もて悩むかな」と、おぼし続け

給ふ。

【賢木】

一方、源氏の心には、寺院に参籠していても、世の無常を思う気持ちとともに藤壺への思いが消えない。この自分の心中に思う「あぢきなし」には、仏道に憧れながらも、思うようにならない自分自身を、どうすることもできないもどかしさや嘆きがあがえる。同じく藤壺への思慕について「あぢきなき事」と表現する例が二例あり、一例はやはり源氏自身が自分について思うところ(⑨)、もう一例は二人の間柄について責任の一端を感じる王命婦の心中である(⑩)。

⑨僧都、世の、常なき御物語、後の世の事など、きこえ知らせ給ふ。わが罪のほど恐ろしう、あぢきなき事に、心をしめて、生けるかぎり、これを思ひ悩むべきなめり。まして後の世の、いみじかるべきこと、おほし続けて…

【若紫】

⑩あぢきなき事に、御心を碎き給ひし昔の事、をりりの御有様、思ひ続けらるゝにも、物思ひなくて我も人も過ぐし給ひぬべかりける世を、心と、思し嘆きけるを、くやしう、我(が)心ひとつにか、らん事のやうにぞ、おほゆる。

【須磨】

⑩の「あぢきなし」に、注釈では「王命婦から源氏への批判」を読みとるものもあるようだが、筆者としては、事に加担した当事者としての立場から、「思うところとは違ってしまつて、どうにもならない」と思う王命婦の気持ち「あぢきなき事に…」という表現となつていると解釈したい。

また、「あかず悲しと思ふこと多く、あぢきなく、さるまじきことにつけても、あやしく物思はしく、心に飽かずおほゆること添ひたる身」だと紫上に語る例(若菜下)も一例あり、源氏が心を許す相手である藤壺や紫上には、自分の「あぢきなさ」を口にかけていることが注目される。これらの自分について述べられる「あぢきなし」は、思わず口をつけて出る「我ながらどうすることもできない」という弱気な反省、諦念に至る前はやや自虐的な自己批判のように感じられないだろうか。

二―二、「あぢきなし」の基本的語義

次に、前段以外の対象に用いられた「あぢきなし」が、同じように「(自分の)思うようでなく、どうにもな

らない」と解せる場合にはどのようなものがあるか挙げてみる。これらも注釈書では「つまらない・面白くない」と訳されていることがほとんどだ。

⑪「かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語りどもにも、あだなる男、色好み、…かやうなることを、いひ集めたるにも、〈そのような昔語り中の人は〉つひに、誰にかよるかたありてこそあめれ。〈対して私は〉あやしく、浮きても過ぐしつる有様かな。げに、のたまひつるやうに、人より異なる宿世も、ありける身ながら、人の、忍びがたく、飽かぬことにする物思ひ、離れぬ身にて、やみなんとすらん。あぢきなくもあるかな」など、思ひ続けて…

【若菜卜】

紫上が、源氏が訪れない夜に、女房たちに物語などを讀ませて聞きながら、あれこれと思いめぐらす場面である。自分のこれまでをしみじみと振り返って、結局、ままならぬ人生をどうすることもかなわないのだという嘆き、そして諦観。（この物思いの夜半より紫上は病に倒れる。）このような「あぢきなし」は、先の例も含め、

過去から現在までを振り返って、事が自分の思うようでなく、またそれをどうすることもできない。（どうにもならない。）

という事態の表現に用いられていると考えられる。それは次の、病床の柏木があれこれと思ひ悩む例の、「うちかへし」という語にもよくあらわれていると思う。

⑫「…よろづのこと、今はのとぢめには、みな、消えぬべきわざなり。…」など、つれづれに、思ひ続くるも、うちかへし、いと、あぢきなし。「など、かく、〈自分は〉程もなくしなしつる身ならむ」と、かきくらし、思ひ乱れて、…

【柏木】

だからこそ、そこには後悔の思いが同時に表現されることも多い。大君が亡くなって女房と語り合う薫の心中が描写される次の例では、「とり返さまほしく」の語がそれにあたるだろう。

⑬…誰もたれも、泣き惑ふこと尽きせず。〈薫は〉「わが心から、〈匂宮を中君に仲介して〉あぢきなきことを、〈大君に〉思はせたてまつりけんこと」と、とり返さまほしく、なべての世もつらきに、

【総角】

⑭ 〈落葉宮への思慕が募る夕霧。しかし、宮は塗籠にこもり、声を上げて泣く〉

：年ごろ、「いまは〈安心〉と、うらなきさまにうちののみ、解け給へる〈雲井雁の〉さまを、思ひ出(づ)るも、わが心もて、いと、あぢきなう思ひ続けらるれば、あながちにも、こしらへ聞え給はず、嘆き明かし給うつ。 【夕霧】

⑬⑭では「わが心から」「わが心もて」の語によって、「現在の、あるいは起こってしまった事態が自分の思うようでない」ものの、それは実は自分がしてしまったことの結果であることが示されてもいる。源氏の藤壺への思いも、自ら選んだことである。このような場合、「自分はそんなつもりではなかったのに：」という「本意」の気持ちを感じられることもある。次の例は、源氏の不興を買うのは「本意ではなかった：」と思いつながら、してしまったことの大きさ、取り返しがつかないという思いにさいなまれていった柏木の、夕霧に対する臨終間近のことばである。

⑮ 「六条院に、いさ、かなる違い目ありて、月頃、心のうちに、かしこまり申す事なん、侍りしを。

：猶、〈私を〉ゆるされぬ御心ばへあるさまに、〈源氏の〉御目じりを見たてまつり給へて、いと、世にながらへん事も、はゞかり多う思えなり侍りて、あぢきなう思ひ給へしに、心の、騒ぎそめて、かく、静まらずなりぬるになん。：」 【柏木】

特に次の⑯～⑰のように、未来のことに「あぢきなし」が用いられると、「自分が思うようでない」ことになるといやだ、というような、これからの事態が自分の意図とは異なるものになることへの危惧が読みとれる。

⑯女〈空蟬〉も、さる御消息ありけるに、〈源氏が〉おぼしたばかりつらん程は、浅くしも思ひなされねど、さりとして、うちとけ、人げなき有様を、みえたてまつりても、あぢきなく、夢のやうにて過ぎにし嘆きを、又や加へん、と、思ひ乱れて：

【帚木】
⑰ 〈内大臣は、玉鬘が実は自分の娘であったことを源氏から知らされて、養育していた源氏と玉鬘の関係を疑う〉

「それ〈源氏が玉鬘を愛人にしていたこと〉を、疵とすべきことかは。殊更にも、かの〈源氏の〉

御あたりにふれば、せむに、などか、おほえの劣らむ。宮仕へさまにおもむき給へらば、〈弘徽殿〉女御などのおほさむ事も、あぢきなし」とおほせど…

【行幸】

⑱ 〈源氏は、紫上の希望により女三宮と対面させることにするが、女三宮の幼さが気になる〉

〈源氏は〉「御なかうるはしくて、過ぐし給へ」とおぼすあまりに、〈女三宮の〉「何心もなき御ありさまを、〈紫上に〉見あらはされんも、恥づかしく、あぢきなけれど、〈紫上が〉さのたまはんを、「心隔てんも、あいなし」と、おぼすなりけり。

【若菜上】

⑲ 〈浮舟の母は匂宮が浮舟の部屋に侵入した件に驚いて、浮舟を二条院から連れ出す〉

「あはれ、この御身〈浮舟〉ひとつを、よろづに、もて悩み聞ゆるかな。心にかなはぬ世には、あり経まじき物にこそ、ありけれ。…この御ゆかりは、〈八宮が浮舟を娘と認めなかつたため〉「心憂し」と、思ひ聞えしあたりを、むつび聞ゆるに、便なき事も出で来なば、いと、人笑へなるべし。あぢ

きなしや。…

【東屋】

以上のように、「あぢきなし」が「自分の思うようでない」ことを表す用法は、二一で取り上げた「世」などに対して用いる例も含めて、それが「どうにもならない」ことであるとか、「不本意な」ことであるとかのニュアンスを持つ場合もあるが、源氏物語の全用例の半数以上にのぼる。枕草子の例も、竹内氏も述べるように「作者にとつて納得がいかない」事柄を言っていると解釈できるから、「自分の思うのと違う」ということである。これらの分析から、「事が自分の思うようでない」ということが、「あぢきなし」の基本的語義であるとひとまず考えられよう。

二二三、不満・批判の「あぢきなし」

さて、「あぢきなし」には、これまで見てきたような用例以外に、他者（時に自分自身）への不満や批判ととれるような場合がある。

⑳ おとゞ 〈左大臣〉の、〈右大臣との〉御なかも、もとよりそばくしうおはする、故院の御世には、〈左大臣が〉わがま、におはせしを、時うつ

りて、〈右大臣が〉したり顔におはするを、〈左大臣は〉あぢきなしとおぼしたる、ことわりなり。

【賢木】

混乱しそうな文だが、要するに左大臣にとって、「事が自分の思うようになっていない」、想定外・期待外れであると思っているのだと解釈して良いかと思う。ただし、現状を受け入れて諦めにつながる「あぢきなし」もあつたが、こちらは思うようでないことに不満を抱く例である。次のように、相手が「思うようでない」と不満に思っているだろう、と推察する例もあつた。

②① 〈源氏が紫上に〉「〈朱雀〉院の、たのもしげなく

なり給ひにたる、御とぶらひに参りて。…女三宮の御ことを、いと、捨てがたげにおぼして、しかじかなむ、のたまひつけしかば、心ぐるしくて、〈女三宮降嫁を〉え聞えいなびずなりにしを、…〈御身は〉あぢきなくやおぼさるべき。いみじきことありとも、御ため、あるよりかはる事は、さらにあるまじきを、心なおき給ひそよ。…【若菜上】

②②や、次に挙げる②③のような例に、「つまらない」の訳語が当てられることはよくわかる。基本的には「思

い通りでない・期待外れだ」という場面で用いられているのだが、一步踏み込んでそこに込められた「不満の気持ち」をそう訳することも可能だろう。

②② 〈方違えて紀守邸に泊った源氏は、空蟬とその弟・小君との会話を立ち聞きする〉

〈小君〉「…音に聞きつる〈源氏の〉御有様を見たてまつりつる。げにこそ、めでたかりけれ」

〈空蟬〉「昼ならましかば、覗きて見たてまつりてまし」と、ねぶたげにいひて、顔ひき入れつる声す。「ねたく。心とゞめて、問ひ聞けかし」と、〈源氏は〉あぢきなく思す。

【帚木】

②③ 〈夕霧邸で六の君と匂宮の三日夜の宴が盛大に行われたが、薫の前駆の男たちで、宴にまじれなかつたらしい者が薫の三条宮に戻って嘆きあつている〉

「わが殿の、なかおいらかに、この殿〈夕霧〉の御婿に、うちならせ給ふまじき」「あぢきなき御独り住みなりや」と、中門のもとにて、つぶやきけるを、〈薫は〉聞きつけ給ひて、〈其不平を〉「をかし」となん、思しける。【宿木】

ただし、②のような場面だともう少し不快感が強いように感じられる。

②④（霰降る嵐の夜、源氏は祖母尼君が亡くなって心細い様子の紫上邸に泊る。翌日、源氏は惟光使いに寄越す）

〈源氏伝言〉「まゐり来べきを、内裏より召しあればなむ。心苦しう見たてまつりしも、しづ心なく」とて、とのゐ人たてまつれり。〔少納言〕「あぢきなうもあるかな。たはぶれにても、ものゝはじめに、この御事よ」

「共寝」はなかった（たはぶれ）としても、最初からこの状態なんて「あぢきないことですよ」と、紫上の乳母である少納言が不満がる発話である。結婚なら三日通うのが当然であるし、二条院に引き取りたいとまで言うのなら、源氏本人が来ないとは思っても見なかった、ということだろう。とはいえ、一夜を過ごしたといっても真実の結婚とは違うことを少納言も承知しているのだから、源氏を強く非難する、というまでには至っていないと思われる。源氏の真意をはかりかね、思わず口にした「期待外れでどうしようもない」

という気持ち——不快感が「あぢきなし」の語に表れたと見たい。この場合、意識としても「つまらない」ではすまないはずで、「いやになっちゃうわね！」とでもなろうか。

次の例は、髭黒大将の娘大君が院参することになり、それを不満に思う帝から問いただされた左近中将（大君の兄）が、玉鬘に詰め寄るところである。

②⑤「（主上の）御気色、よろしからず。…（私と）おぼしとるかた異にて、かう（大君の院参を）、（母君は）おぼし立ちにしかば、（私は）ともかくも、聞えがたくて侍るに、かゝる（主上の）仰言の侍れば、なにがしらが身のあぢきなくなん侍る」と、「いと物し」と思ひて、かんの君（玉鬘）を申し給ふ。

【竹河】
ここでも、「自分たちの身の上があぢきない」＝「いと物しと思う」という構図だから、「あぢきなし」の語自体に非難の意を汲むべきはでなく、「思うようにいかない、不本意な状況になりそうでいやだ」という不快感を表していると解せよう。

二―二で見たような「事が自分の思うようでない↓

不本意↓後悔」は自分自身に原因があつた場合だったが、②④⑤のような「思うようでない↓不本意↓不満・不快」は、他者に原因がある場合だと整理できる。

しかし、「あぢきなし」が、確かに何らかの行為に対する批判の表現として機能していると考えられる例がある。

②⑥〈春宮にもと思つていた雲井雁が、夕霧と思ひ合つてゐることを老女房の陰口で知つた内大臣は、大宮に苦言を申し入れるが…〉

〈大宮が内大臣に〉「…さても、誰かは、かゝる事は聞えけん。よからぬ人の言につきて、きはだけく思しのためふも、あぢきなく、むなしき事にて、人〈雲井雁〉の御名やげれん」

【乙女】

⑦〈柏木は、源氏が紫上を寵愛し、女三宮を疎かに扱つてゐるとして、女三宮を気の毒がる〉

「いかなれば花に木伝ううぐひす〈源氏〉のさくら〈女三宮〉をわきてねぐらとはせぬ

春の鳥の、桜ひとつにとまらぬ心よ。「あやし」とおぼゆる事ぞかし」と、口ずさびにいへば、〈夕霧は〉「いで、あな、あぢきなのものあつかひや。

さればよ」とおもふ。

【若菜上】

⑧〈紫上死後、源氏は念仏や読経をし、後世の安樂を願つて過ごす〉

されど、人聞きをはゞかり給ふ〈出家を憚つてゐる〉なむ、あぢきなかりける。

【御法】

それぞれ、相手に面と向かつて・心の中で・地の文で、「…するなんてあぢきない」という評言をぶつけている。先の②④⑤は「あぢきなきことかな」「身のあぢきなく侍る」と、直接は相手に向けられていない「あぢきなし」だが、この三例は相手の行為そのものを「あぢきなし」と形容している違いがある。

注釈書類の訳は、これらもすべて「つまらない」だが、「自分の思うようでない」を第一義とすると、批評の言葉としては切つ先が鈍い。それで、先行研究では「条理に合わない」という語義を根本としたのだと考えられるが、道理に合わないことへの批評の語としては「わりなし」があり、それとの違いを明確にするなら、やはり「あぢきなし」は「条理に合わない」ではすませられない。たとえば②⑥では、事実を知らぬ（と大宮は思つている）内大臣の言、⑦でも柏木のいわれ

のない源氏への非難に対して、大宮や夕霧が発したり抱いたりする批判のことばである。とすると、「(人が)思うところは(事実・現実と)違っている」ということではないか。ひいては、「見当違い」とか、⑳のよな例は「心得違い」と訳すこともできよう。このように考えれば、「思うようでない」という中心的な語義から派生してくることは十分説明がつくと思われる。「見当違い」と訳したい例としては、㉗などの他に次のようなものもある。

㉘(源氏から女三宮降嫁を聞かされた紫上は、それを懸命に受け入れようとするが…) 心のうちにも、「かく、空より出で来にたるやうなる事にて(源氏も)のがれ給ふかたなきを、憎げにも聞えなきじ。…塞かるべき方なかるべきものから、をこがましく思ひむすぼゝるゝさま、世

(の)人に、もり聞えじ。(私の継母である)式部卿(の)大北の方、つねにうけはしげなる事どもを、の給ひ出でつゝ、あぢきなき、(髭黒)大將の御ことにてさへ、あやしく、恨みそねみ給ふなるを。かやうに聞きて、いかに、いちじるしくお

もひあはせ給はん」など、おいらかなる、人の御心といへど、いかでかは、かばかりの隈はなからん

【若菜上】

この「大將の御こと」とは、大北の方が、紫上が玉鬘を髭黒に取り持ったために自分の娘が離縁することになったと考えていることを指す。これはまさに紫上にとつては「見当違い」な恨みであつて、「つまらない」とか「わけがわからない」という評語では不十分ではなからうか。

このような強い批判の「あぢきなし」は、相手の行為を諷める言葉として用いられていると考えられる場合もある。

㉙(夜明けの空を見ようと誘う源氏に、「埋もれすくよか」な末摘花が反応しないので、そばに控えた老女房たちが促す)

「はや、いでさせ給へ。あぢきなし。こゝろ美しきこそ」など、(女房が)教へ聞ゆれば、さすがに人の聞ゆる事を、えいなび給はぬ御心にて、とかうひきつくるひて、あざり出で給へり。【末摘花】

㉚(明石姫君を紫上の養女として二条院に引き取る

という源氏の申し出に逡巡する明石上に)

尼君、おもひやり深き人にて、「あぢきなし」。〈姫君を〉みたてまつらざらむ事は、いと、胸いたかりぬべけれど、つひに、この御ためによるべからむことをこそ、おもはめ。あさくおほして〈源氏が〉のたまふことにはあらじ。ただ、うち頼み聞えて、わたしだてまつり給ひてよ。…【薄雲】

③①の例について、山崎氏は「あぢきなし」の意義を知ると解する諸注を「文章全体の緊張感が突然弛緩してしまつて、いわば拍子抜けしたような印象を与える」と退け、「ほんとはわからない、しようのない人ですね」とでもいうような、ほとんど詠嘆とも云えそうな、なげきの表現となつていると解すべきであると思つ」と述べているのだが、③②のような類例を見ると、「あぢきなし」の語義の根幹に「なげき」も含まれるわけではなく、あくまでも文脈上、用いられる場面によつて、「どうしようもないことだ」という心情までが表現されていると解せるときがあるということだと思つ。そして、この二例は、やはり「それは心得違いですよ」

という相手への指導・批判の言葉と考えた方が、一貫した説明ができるのではないだろうか。

③②〈柏木死後の夕霧の心中。柏木と女三宮とのことに気づき、柏木の選択を残念に思う〉

「…さるまじき事に心を乱りて、かくしも、身にかふべきことにやはありける。人（女三宮）のためにもいとほしう、我（が）身、はた、いたづらにやなすべき。さるべき、昔の契（り）といひながら、いと軽かるしう、あぢきなきことなりかし」など、心一つに思へど、… 【柏木】

この③②も含めて、批判と解せる用法は一六例を数える。

二一四

最後に、連用形の「副詞的用法」と言われる例について検討しておきたい。「あぢきなく思ふ」「あぢきなくあり」は、「あぢきなし」とほぼ同義の用法であると考えられるが、その他の用言を修飾する「あぢきなし」は、「思うようでなく」と解せる場合ばかりではない。次の例は、野分の日に端近に立つ紫上をのぞき見た夕霧の印象の描写である。

③③：廂の御座にみ給へる人、ものにまぎるべくもあらず、気高く、清らに、さと匂ふ心ちして、春のあけぼの、霞の間より、おもしろきかば櫻の咲きみだれたるを見る心地す。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも、うつりくるやうに、愛敬は匂ひちりて、またなくめづらしき、人の御さまなり。

【野分】

ただ呆然と、その「匂いくるような」美しさに圧倒される様子が実によく伝わってくるが、この「あぢきなく」は「思うようでない（しかもそれはどうにもしようがない）」という基本的語義から派生した、「どうしようもなく・どうすることもできず」という副詞的な用法として働いているのではないだろうか。次の例も同様と考えられる。

③④（薫は横川僧都に浮舟入水の事情を聞き、浮舟の兄弟である小君を、浮舟のいる小野の尼君のもとに遣わすことにする。それに先だつて僧都から妹尼に手紙が届く）

「昨晚、大将殿の御使にて、小君や、まうで給へりし。「事の心、うけ給はりしに、〈授戒は〉あぢ

きなく、かへりて、臆し侍りてなん」と、ひめ君（浮舟）に聞え給へ。：「と、書き給へり。【夢浮橋】次の例は、源氏物語冒頭の例でもあり、「あいなし」との相違を考える上でも重要な用例である。

③⑤上達部・上人なども、あいなく、目をそばめつ、いと、まばゆき、人の御おほえなり。唐土にも、かゝる、事の起りにこそ、世も乱れ悪しかりけれ」と、やうく、天の下にも、あぢきなう、人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も、ひき出でつべうなりゆくに、いと、はしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへの、たぐひなきを頼みにて、まじらひ給ふ。

【桐壺】

この文意を解釈しようとするときに注意すべきは、語り手は登場人物のだれの立場に立つて、この地の文の「あいなく」や「あぢきなう」を用いているのか、ということだ。先に、源氏の行為を地の文で「あぢきなし」と批判する例（②⑧）を見た。その時、語り手は、源氏の心がどうしても自分一人のものにはならないという深い悩みのうちに亡くなり、その悩みから出家したいという願いも、源氏によって留められていた紫上に、

読者の気持ちと同調するような一文を入れたのではなかったか。心から出家を願った紫上を妨げた当の源氏が、今度は紫上を亡くした悲しみによって出家したと言われては…、というような外聞を気にして出家もしないなんて「あぢきなし！」という評言は、紫上方の立場からの物言いである。ひるがえって⑤は、まだ物語は始まったばかりではありながら、主人公として描かれているのは桐壺更衣その人である。身分はそれほど高くない、けれども異例な寵愛を受け、そのために嫉まれ、恨まれ、病気がちな彼女に、帝の気持ちはますます傾く。しかし、更衣の窮状に追いつき打ちをかけるように、世間（貴族社会）の目は冷たい。更衣の頼れるのは帝の気持ち一つである…。こんな場面で、「あもなく」目をそばめる」という行為を、山崎氏の言うような「何とかしなくてはならないと思う、しかしどうしようにもすべがない」「困惑と諦観の思い」でそうしている、と解すべきだろうか。また、「あぢきなく」世のもて悩みぐさになる」のは、帝の更衣寵愛が「条理にもとり、ことわりをこえて、正にあり得べからざること」であって、「まるで帝王の道を外れた、こん

なことがあってよいのか」と批判されることだからなのだろうか。筆者は、この「あいなし」「あぢきなし」は、語り手が更衣の立場から用いたことばではないかと考える。つまり、「あいなし」は「目をそばめる」にかかるとのだから、辻本氏の解釈するように、更衣には何の落ち度もない（帝もまだ国政を疎かにしているわけでもない）のに「正当な理由なく」そっぽを向かれる。（辻本氏も紹介しているが「何といふわきまへもなしにうちつけに物すること也。こゝもその意にて、おのが身にかゝらぬ人までもなんといふことなしに目をそばむる也」という宣長の言（源氏物語玉の小櫛）も参考にできる。）そして「あぢきなく」も、「もて悩みぐさにする」を修飾する用法であるから、「思うようでない」から派生した「どうしようもなく」の語と解せばよいのである。更衣にとつては「はしたなきこと」だが、どうすることもできない世の人のいわれなき非難の目。悲劇の更衣像が、読者の心に刻まれていく。作者紫式部は、桐壺更衣にとつて「目をそばめ」られたり、「もて悩みぐさになつたりすることが「あいなき」ことであり「あぢきない」ことである、と伝

える意図でこれらの「評価」語を用いたと解したい。
連用形の用法を「あぢきなく思う」のような場合と同じく「あぢきなしと思つて」、「あぢきないこととして」と解釈してしまつと、文意を誤ることがある。あくまでも、後接の動詞などに表される「行為」を修飾する語として理解すれば、混乱は避けられるのではないだろうか。

三、結語

以上見てきたように、中古、特に源氏物語の「あぢきなし」の用法は多岐にわたっているが、その語義は次のように整理できるだろう。

◎「あぢきなし」の基本的な語義は、「事が(自分の)思うようでない」ということである。

「思うようでない」を根幹として、いくつかの意味が派生する。

一、「過去や現在の物事が自分の思うようでないが、それをどうすることもできない」、あるいは「これからの物事が自分の思うようにならないだろう」という認識をあらわす。

1. その状況を受け入れて「ままならぬものだ」と悟るニュアンスを読みとれることがある。(諦観)

2. 「どうしようもない」と、その状況を嘆くニュアンスを読みとれることがある。(慨嘆)

3. 結果としての事態の原因は自分自身にあるという気持ちを読みとれることがある。(後悔)

4. 結果としての事態の原因が自分以外の他者にある場合、不快感を読みとれることがある。(不満・不快)

5. その状況は自分が意図していなかった、期待外れだ、という気持ちを読みとれることがある。(不本意)

二、「物事が相手の思うようでなくどうしようもない」という認識をあらわす。

1. 相手が思っていることが事実・現実と違っていると、他者の行為を「見当違い・心得違いである」と評することが

ある。(批判・非難)

2. 他者の行為を妥当でないものとしてたしなめる言葉に用いられることがある。(指導・諫言)

三、(二)物事が思うようではなくどうしようもない」

から)副詞的に下接する用言にかかり、「どうしようもなく、どうすることもできず」という意味をあらわす。

枕草子の「あぢきなきもの」章段の三つの例のうち、一つめ(自分から進んで宮仕えに出てきたくせに不満げな態度)と三つめ(無理やり婿にしておいて期待外れと嘆く)については、「見当違い」という批判と解釈できるし、二つめ(養女の顔がにくらしげ)は「思うようではなくどうにもならない」という基本語義である。また、衣服の名についてあれこれ疑問をなげかけている場合も、「思うようでない(不満)」と解して問題は無い。「あぢきなし」の語義の中核を、以上のように「思うようでない」と考えるならば、先行研究二者の提示する「あいなし」の語義のうち、「どうしよ

うもない、という諦観と嘆き」とは区別がはっきりしなくなる。また、桐壺卷冒頭例の検討などによっても、「あいなし」の基本的な語義を、「どうしようもない」とするのには抵抗がある。結局の所どちらの語も「嘆き・諦観」につながる基礎を持っているし、文脈によっては「面白くない」と訳してもよい場合もあるだろう。しかし、根本的なところ、さまざまな語義を派生する根幹としては、「あいなし」は「正当な理由がない」「あぢきなし」は「思うようでない」と考えておくと、両者の違いをすっきりと説明できるように思う。さらに、同じく「つまらない」と訳せても、「すさまじ」が客観的な基準・前提に照らして合致しない不快感をあらわすのとは異なっていることになる。三語は、それらの表す「不快」の根拠がどこにあるか、という点が大きく異なっていると言えらるだろう。「現代語訳」では語の持つ基本的な意味からかなり乖離した訳語が選ばれることも、ときには許されるように思う。しかし、根本的にその語がどのような意味を「核」として持っているかは、常に意識されていなくてはならないとも思うのである。

本稿では源氏物語の「あぢきなし」の用例をすべて掲げることはできなかったし、「あいなし」や「すさまじ」、また「わりなし」といった類義語との比較も、先行研究に頼ったものとなってしまった。稿を改めて、今後順次取り上げていきたい。

(8) 「あいなき」「あいなし」考 『南山国文論集』二三、南
山大学国語学国文学会、一九九九

注

- (1) 犬塚旦『王朝美的語詞の研究』（笠間書院・一九七三）、梅野きみ子『えんとその周辺 平安文学の美的語彙の研究』（笠間書院・一九七九）、同『王朝の美的語詞』（新典社・一九九五）などがある。
- (2) 「枕草子」の「にくし」の価値 『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂、一九九三
- (3) 「枕草子」の「すさまじ」の位置 『跡見学園短期大学紀要』二九、一九九三
- (4) 以下、本文は岩波書店『日本古典文学大系』による。ただし、旧字体・送りがな等を、筆者の判断で適宜変更している場合がある。
- (5) 『平安時代和文の研究』明治書院、一九八六
- (6) 『源氏物語の語義の研究』風間書房、一九七八
- (7) (6) に同